僕の気持ちは複雑だった

寝ながら、また小学校の時のことを思い出していた。

楢元先生はよくタバコが切れた時、僕に近所まで買いに行かせた。
教室から出られる解放感で、お使いに行くのは、
僕は、うれしくて、ゆっくり、ぶらぶら行った。

近所の知り合いのタバコ屋のおばさんは、
てっきり僕の親が買いに来させたと思って、
「ぼん、学校、休んだんか。」と尋ねる。
「休んでえへん、先生のお使いや。」と言うと、
おばさんはあきれ顔だった。

授業中、タバコを吸いながら、「何事も楽しくやろう」と、
いつも、ニコニコ顔で、先生は楽しそうに僕らに教えた。

秋の学芸会の出演者の選定の時だった。
劇に出たい人は、黒板の前で、台本を読む審査を受けた。
学年でたくさんの応募者の中、僕も受けたが落ちた。

放課後、皆が講堂で練習をしているのを
うらやましそうに窓から見ていた僕に先生は気がついた。

先生に、「来年は僕ももっと練習して劇に出たい」と言ったら、
先生は「練習しよう」と言って、放課後、僕を職員室へ呼んだ。
国語の教科書の読み書きの特訓を受けたが、本当は、
僕が家では全く勉強しないので、補習を兼ねて、してくれたのだと思う。

帰りは、よく先生と京都駅の方へ行き、中華そば屋で、中華そばを食べた。
それで僕はよく、胡椒のツーンとする、においの夢を見る。